新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会
〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男方　TEL 0258－32－0428

第48回東四国国体での健闘をした選手、監督をたたえる

新潟県山岳協会
会長　室賀輝男

7月30日～8月1日の北信越大会で、少年男子を除く選手団が、東四国国体への出場権を獲得、その後それぞれ多忙な学業や仕事を犠牲に、地元でのトレーニング、遠隔地四国路へ再度の調査、遠征を重ね、10月25日から28日の本大会で健闘されたことに心から敬意を表し、ご苦労様でしたと申し上げます。本大会には五十嵐、小林、藤井、森の各県山岳協会役員と現地へ赴き、登攀競技、縦走競技、踏査競技に全精力をふり絞って、勝利に向って真っしぐらにスタートされる選手を激励し、一人幾役も勤めねばならぬ超多忙な監督の気配り、忙しさ、苦悶等々のご苦労に接し、選手監督一体となった熱い戦に大きな感動をうけ、こみ上げるものを感じて帰りました。

出会い、競い、そして未来へをスローガンに、剣山山系祖谷山系で開催された国体山岳競技での、精神的、肉体的の難儀ご苦労は到底筆をもって書き現すことが出来ませんが、フルエントリーの北海道、地元開催県の他は、3チーム揃っての参加選手団は、新潟県の他は数少ない、池田町での閉会式におしくも入賞を逃したものの、その実力は紙一重、来年の愛知県に素晴しい実を結ぶものと信じます。

本大会で多くの全国から参加の選手や地元民との間で生まれた、人と人とのふれあい、友情はこれからの人生で何にも替え難い宝、財産となることでしょう。国体参加の大きな収獲であり、大事に育ててもらいたいものです。

此処に選手、監督の健闘を称え、今春来物心両面から支援された県、県体協、新発田市、県山岳協会の各位に衷心より感謝申し上げます。

平成五年十月三十日

東四国国体会場トレーニング紀行

少年女子監督　渡辺正之
（三条東高等学校）

第48回国体で立派な成績で活躍した少年女子チームの監督として尽力された渡辺正之先生から、直前トレーニングで現地へ行かれた模様の報告がまいっております。

先生のお許しをいただいて、一部分掲載させていただきます。

（理事長）

―・―・―・―・―

8月16日から25日まで9泊10日の日程で、徳島県の会場を見て来ました。初めて行くところとあって、16日の朝7時に出発し、着いたのが夜11時55分です。17時間もかかりました。

県山協のワゴン車を三条燕インターから北陸道に乗り入れ、名神高速、中国自動車道、有料道路を乗り継いで、岡山県に出ました。そこから瀬戸大橋を渡り、そのまま高速道に従っていったん高知県に足を踏み込み、大きく回る感じで徳島の競技会場をめざしました。

距離的には間違ってはいないようです。しかし、徳島県になってからの国場439号

新年会案内

日時　1994年1月23日（日）
　　12時開宴
会場　新潟市　イタリア軒
会費　10,000円
申込　〒940
　　長岡市学校町1－12－23
　　室賀輝男方
　　新潟県山岳協会
　　☎0258－32－0428
　　FAX 1754

理事会開催案内

日時　1994年1月23日（日）
　　10時30分～11時40分
会場　新潟市　イタリア軒

線はあまりにもひど過ぎました。道幅は狭く、一車線です。乗用車どうしでもすれ違い出来ません。その上、直線と呼べる部分がなく、カーブの連続です。ハンドルに両手を置いたままで、手をはなすわけにいかないのです。

京柱（きょうばしら）峠を越えましたが、カーブと傾斜のきつい道が続きました。上りも下りも車はあえぎあえぎです。ギアはローかセカンドしか使えませんでした。

台風5号のせいであちこち土砂崩れしています。倒木もあって、道路端に横たえてありました。

439号線に入ってからの2時間は、まったく対向車に出合いませんでした。月曜日といっても夜の10時頃です。まだ通る自動車があってもいいはずです。地元の人達もあまり利用したくない道路だと、後日聞きました。

少年の会場となる東祖谷山村は人口が減って1900名とか。切り立ったV字谷の中腹を削って国道439が伸びています。崖となっている部分がいつ崩れてもおかしくありません。ところどころ岩が、あるいは土砂となって道路に押し出して来ていました。そんなところはもちろん工事中です。ブルトーザーなどの機械を使うため、昼間はほとんど通行止めになっています。

テントを張っていたキャンプ場から各競技コースのスタート地点に行くまでに、通行の時間制限をしてある場所が三つもありました。

朝4時起床、6時出発を決めて、朝8時からの通行止めをはずすようにしました。しかし、帰りは必ずこの時間制限にひっかかって、毎日どこかで待たされました。

東祖谷山村は文字通り何もないところです。生鮮食料品を現地で買うことにして、ほとんど三条で用意しないまま来ました。トマトもキュウリも店にありません。肉はすべて冷凍になっています。新潟で生で売っているものが、こちらでは長持ちさせるためそのまま冷凍庫に放り込まれた感じです。魚は一度だけサバを見かけました。冷凍庫の中でカチンカチンです。

パンは毎週金曜に岡山県の工場から運ばれて来るとか。火曜日に買ったパンのひとつは、すでにカビだらけで食べられませんでした。

一週間以上もテント生活を続けたのに、雨の降らない日は一日もありませんでした。朝少し晴れていても、午後になると必ず雨が当たって来ます。縦走コースT3にある剣山は、とうとうその姿を見せてくれませんでした。中腹から上はいつも雲の中です。次回のために楽しみを先に延してくれたのでしょう。

わがクラブ ③

「佐渡山岳会」の今

これまであまり紹介する機会のなかった、日本海に浮かぶ佐渡の山岳会について、存在するという報告と、その活動の一端をこの場をお借りして紹介させて頂きます。

私どもの会は戦前より活動を致しております。遡れば昭和6年まで辿ることができます。この年、東京高師附属中学生の大佐渡山脈での遭難がきっかけでした。

当時を知る資料として、多くの写真が残されております。山のスナップと共に、出征兵士を送る人垣に混じる山岳会旗の写っているものもあります。

また、ひときわ特徴あるものとして、法人格を有している事が良く挙げられます。

会は昭和29年に「財団法人佐渡山岳会」として認可され、今日に至っております。この事は全国的に見ても特異な事だそうです。

これらは先輩が築いてくれた伝統であり、有難いものと感じております。

その定款には、「この法人は登山、ハイキング、スキー、山の自然科学研究を通じて郷土の自然開発、登山施設の整備等を行い、一般国民の文化的厚生運動並びに科学研究、体育運動、山岳の自然風物保護、観光等に寄与する事を目的とする」と、記載されております。

これは、今私どもが行い、そして目指しているものと、軌を一にしております。

現在の会員数は、41名です。内訳は20代が8名、30代11名、40代12名、そして50代以上が10名となっております。

人数はともかく、この年齢構成は、理想的なバランスとして満足しております。

しかし、つい数年前まではこうではありませんでした。

それはほとんどが30代後半以降の者で構成され、年々その平均年齢が上昇する傾向にありました。

そこで、このパターンをなんとか打破しようと検討していく中で、いくつかの改善案を逐次実行致しました。

それは、外に向かって鐘や太鼓を叩いても何等意味がない、そうではなく、今いる会員のニーズを確認し、より内容のある活動を行い、一人一人の満足度を上げて行く、そんな会にしようという事でした。

「山へ行く山岳会」「あねさんの入る山岳会」「わかりやすい山岳会」などをモットーとし、行動としては〝とに

かく有名な山に登ろう・尾瀬と白馬は毎年行こう〟でした。

面白いもので、これらの活動を繰り返していると、今までは遠い！　と思っていた、越後や北アルプスの山が、以外と近く感じられ、変な垣根が一つ取り払われました。

それと、佐渡の山も捨てた物ではない、との再認識でした。それらが月報の山行記録を、よりバラエテーに富むものにいたしました。

そんな雰囲気になってきたここ数年、有難いことに会員数の増加とともに若年化傾向を示し始めました。

その中で、決定打はやはり平成3年8月に実施した、台湾の玉山（3954m、旧称新高山）への海外遠征だったかと思われます。

漠然として語り継がれていたテーマを具体化し、会員11人して実施しました。

これは参加の有無は別として、今の会なら大概の事は出来る、とのムードが無形文化財として残りました。

また会の活動にも自然と新基軸も現れて来つつあります。それは野鳥の会等、地域の他団体との交流であり、また駅伝への参加と佐渡トライアスロンへの選手、あるいはボランテアとしての参加等など、一見登山と関係のなさそうな行事への積極的な参加です。これらが会の雰囲気をいやが上にもプラス思考へと動かしております。

こんな事を書くと、会に悩みは無いのかと問われますが、ないのです。

在るとすればせいぜい、女性会員が、もう少し多ければ！　位なものです。

何故ならば、この会が今後また、悩み多き世代に直面するのは、早くて20年後だからです。

つまり、今入会した20代会員が、我々40代になって、それが問題になるのが最初だからであります。

そして、この世代が開拓する新会員層こそ、会を21世紀へ、そして佐渡山岳会を百年につなげるランナーとなります。

そのためにも、先輩より受け継がれた伝統を絶やす事なく、春夏秋冬、繰り返し繰り返し、好きな山に行こうと考えております。

その他、活動として、登山道整備とか、春・秋の島民参加の登山会等がございます。

これらは何処の山岳会も行っている事ですが、私どもも大切な行事として毎年行っております。

これらに付きましては、山の紹介を兼ねてながら、次回以降に報告させて頂きます。

（佐渡山岳会員・活動担当　関　雅志）

柏エスキー山岳部

訪中登山隊　青海を行く(1)

保坂　洋
猪俣　敬一

●不安と感激の初遠征

今回の中国登山遠征の旅は、新潟県山岳協会にとって初の高校生参加の海外遠征だった。隣の長野県はすでに今年で五回目の実施だという。

登頂を目指す青海南山は、4472m。これは日本では体験できない高さだ。不安な思いが入り交じっていた。

○　○　○

7月30日、無事に船旅を終え、中国の上海に上陸した。海外経験のある一部の先生を除き、初めて踏む異国の地に皆感動しているようだった。

翌日は上海から今回の目的地、青海南山のある青海省に飛行機で移動。出発が5時間も遅れるというハプニングもあったが、無事に同省に入ることが出来た。

次の日は、青海省登山隊の手厚い歓迎を受け、初めて現地の高校生と対面した。驚いたことは、かなりの人が日本語を話せるということだった。また、実際の登山活動に入ってさらに驚いたのは、中国側の装備の軽さだった。軽い防寒具代わりの服とデッキシューズ。それと水筒一つ。もし、日本の山で遭難したら、きっと一日もしないうちに死んでしまうだろうと思われた。

●標高3千で頭がボーッ

8月2日、ベースキャンプをはる。青海湖方面を除く三方を山に囲まれ、所々に小川が流れる中国らしい雄大な場所だ。ここをベースにしてこれから4日間、外国人では誰も登ったことのない青海南山のピークの一つに挑戦することになっていた。

メンバーは日本人13人、中国人17人の総勢30人。うち、学生は日本人8人、中国人5人という編成だ。中国人の中には専門の医師や薬剤師、通訳の方もいて、一緒に登ってくれることになっていた。

○　○　○

目指すピークはここから見えず、どれほど大変な登山になるかは予想もできなかった。おまけに、ベースキャンプの標高はすでに3000mを超え、空気が薄いため頭がボーッとして、4472mの山に登るという実感はあまりなかった。中国の人たちが作ってくれた本格的な中華料理も、慣れない高度のためか、あまり食べられなかった。

8月3日。目が覚めると前夜の雨が降り続いていた。テントの外はかなり水が流れてきているようだ。少し頭痛がしたが、皆が外でテントの周りに溝を掘っているので、雨具を着て出た。やはり、靴底

の高さくらいまで水が流れていて、強い雨が降っている。結局その日は雨のために予定を変更して停滞ということになった。

（柏崎日報より転載）

１９９３年中国青海国際高校生登山交流大会
帰　国　の　ご　挨　拶

隊長　藤井　信

新潟県山岳協会主催、第一回新潟県高校生登山部の中国青海省の青海南山（4472m）に遠征、８月５日（月）参加者13名全員14時30分登頂致しました。

ここにご報告申しあげて、関係の皆様のご支援とご協力に心から御礼申し上げます。

青海南山の登山では、中国の高校生と言葉の壁を越えて、登山行動では相互が協力し合え、高度障害を乗り越え、日中の友好を深めた感動の登頂でありました。

この度、登山に参加した中国青海省西寧市第十八中学校（高校）では、夏休み中にもかかわらず、全校挙げての熱烈の歓迎会と交流会も感動致しました。

広大な中国、悠久の中国の史跡の一端を見学体験したことは、大変、有意義な計画であったと思います。ありがとうございました。

１９９４年中国青海高校生登山交流大会計画

新潟県山岳協会主催、第二回中国青海国際高校生登山交流会の概況
（日程、計画内容については、多少の変更もあります）

期　　日　　１９９４年７月26日～８月15日
場　　所　　中国青海省
登山目標　　野牛山（4898.3m）
登山方法　　新潟県高校生、中国高校生との交流登山
経　　費　　25万円（パスポート、ビザの取得申請料は別）
日　　程

７月26日	横浜港乗船	新潟県～横浜列車	
７月27日			船中
７月28日			船中
７月29日	上海着	市内見学	ホテル
７月30日	上海～西寧	飛行機	青海賓館
７月31日	西寧滞在	荷物整理	青海賓館
８月１日	西寧～ＢＣ	ＢＣ標高3200m	ＢＣ
８月２日	ＢＣ～ＡＣ	ＡＣ標高4200m	ＡＣ
８月３日	ＡＣ～野牛山～ＡＣ	山頂アタック	ＡＣ
８月４日	ＡＣ～ＢＣ	撤収	ＢＣ
８月５日	ＢＣ～青海湖	青海湖、日月山見学	キャンプ
８月６日	青海湖～多巴	高地トレーニングセンター 2360m見学	多巴ホテル
８月７日	多巴～西寧	交流、交歓会	青海賓館
８月８日	西寧～	列車の旅	車中
８月９日	～西安	碑林、城壁、大雁塔見学	唐城賓館
８月10日	西安滞在	兵馬涌、華清池見学	唐城賓館
８月11日	西安～上海	飛行機、上海市内見学	ホテル
８月12日	上海滞在	市内見学	ホテル
８月13日	上海港乗船		船中
８月14日			船中
８月15日	神戸港着	神戸～新潟県列車	帰宅

申込一時集約　　１９９４年２月末日
申込者・希望者説明会　　３月12日～13日　会場　長岡
最終締め切り　　１９９４年４月20日　予定
問い合わせ先　　新潟県山岳協会海外登山委員会　藤井　信　☎0258-32-4835

詳細の要項、参加申し込み書については後日連絡します。

指導者研修会案内

加盟団体指導者、指導員の研修会を左記の通り開催します。

期日　平成５年12月５日(日)
　９時より受付
会場　長岡市柳原２－１
　長岡中央公民館
講師　藤井　信　協会副会長
◎青海省開訪山域への海外遠征について
◎高校生青海南山登頂報告
他　講師　新潟大学教授
参加費　２０００円
申込　田中栄弘
☎０２５８－３４－５５９５
　長岡市水道町４－１－17

研修会終了後懇親会（会費３０００円）も予定しております。

会長　山田　智子
事務所　〒９５０
新潟市南笹口１の８の63の７０５
山田智子　方

連　絡

◎越稜山岳会会長・事務所が左記のように替わりました。